

てんかんからみる人物の横顔

～異論異説のてんかん史～

松浦雅人 MATSUURA, Masato

田崎病院副院長／東京医科歯科大学名誉教授

【第30回】

ローマ教皇ピウス9世のてんかん

ピウス9世は自由主義の敵とみなされイタリア国民の支持を失っており、葬儀の際には反教会派の暴徒が教皇の棺を襲うという事件も起こった。一方で、教皇就任直後にてんかん発作が再発し、発作が頻発した時期やブロム剤中毒の時期も経験したと思われるが、ピウス9世は堅い信念でカトリック教会の試練を耐え抜き、中世的教皇から近代的教皇への橋渡し役を担ったともいえよう。

はじめに

ピウス9世(Pius IX, 1792~1878)は史上最も長く在位したローマ教皇で、教皇領の終焉と統一国家イタリアの誕生を目撃し波乱に富んだ人生を送った。Sirvenらは、ピウス9世のてんかんについて『Mayo Clinic Proceedings』誌に報告し、カトリックの教義に与えた影響について考察している¹⁾。それによると、ピウス9世は15歳のときにてんかんを発症し、聖母マリアが受胎告知を受けた聖なる家が保存されている聖地ロレートに、病氣平癒を祈って母親とともに毎年巡礼した。21歳から5年間、グレゴリアナ大学で神学を修めているあいだに、てんかん発作



©Alamy/PPS通信社

ピウス9世(1792~1878)の肖像画

顔の下半分は右側が正常であるが、左側が下垂している。

は消退し、ピウス9世はロレート巡礼のおかげでてんかんが治癒したと感じたという。ピウス9世のこの経験が、教皇就任後に召集した第1回バチカン公会議で、「聖母マリアの無垢受胎説」を決議したことと関連しているのではないかと考察している¹⁾。また、少年のときには教皇の近衛兵になる夢をもっていたが、てんかんを発症してこれをあきらめたことが、その後の教皇

に登りつめる道を開くことになったと述べている¹⁾。本稿ではピウス9世のてんかんについて改めて紹介し、教皇を務めた19世紀のカトリック教会への影響について考えてみたい。

ピウス9世のてんかん¹⁻⁴⁾

本名ジョヴァンニ・マリア・マスタ

SAMPLE

Epilepsy Vol.15 No.2 (2021-11) 55 (123)

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.